

# 令和5年度 ふくしま学力調査分析報告書【概要版】

令和5年12月15日  
福島県教育委員会

## 1 ふくしま学力調査について



### 1 調査の目的

児童生徒一人一人の学力の伸びや学習等に対する意識、生活の状況等を把握する調査を実施し、教育及び教育施策等の成果と課題を検証するとともに、その改善を図るための方策を構築し、一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

### 2 調査実施日

令和5年5月11日（木）～26日（金）

※ 各学校において期間の中から1日を選択し、全学年同日に実施。

### 3 参加学校数・参加人数

(1) 小学校 392校

※ 義務教育学校前期課程及び県立特別支援学校小学部を含む。以下同じ。

(2) 中学校 211校

※ 義務教育学校後期課程及び県立特別支援学校中学部を含む。以下同じ。

(3) 児童生徒数（人）（質問紙を含むいずれかの教科を1つ以上実施した児童生徒の人数）

小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
13,986	13,025	13,465	13,540	13,212

### 4 調査事項

(1) 教科に関する調査

① 小学校第4学年～第6学年 国語、算数

② 中学校第1学年・第2学年 国語、数学

(2) 質問紙調査

○ 学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項

### 5 結果の活用について

(1) 児童生徒の学習改善に活用する

各学校は、個人結果票をもとに児童生徒に学習改善に向けたアドバイスを行う。また、個人結果票を保護者と連携するための資料とし、家庭学習の充実につなげていく。

(2) 各学校の授業改善に活用する

各学校は、返却された結果から児童生徒の「学力のレベル」や「学力の伸び」の状況を分析し、学力を伸ばした可能性の高い取組を校内で共有するなど学力向上のプラン等を見直し、今後の授業改善につなげていく。

## 6 「学力のレベル」と「学力の伸び」について

各学年ごとのレベルの範囲 (白が当該学年のレベルの範囲です)

レベル	各学年ごとのレベルの範囲						レベル	レベル(3分割)	数値
	小4	小5	小6	中1	中2	中3			
レベル12							レベル12	12-A	36
								12-B	35
								12-C	34
レベル11							レベル11	11-A	33
								11-B	32
								11-C	31
レベル10							レベル10	10-A	30
								10-B	29
								10-C	28
レベル9							レベル9	9-A	27
								9-B	26
								9-C	25
レベル8							レベル8	8-A	24
								8-B	23
								8-C	22
レベル7							レベル7	7-A	21
								7-B	20
								7-C	19
レベル6							レベル6	6-A	18
								6-B	17
								6-C	16
レベル5							レベル5	5-A	15
								5-B	14
								5-C	13
レベル4							レベル4	4-A	12
								4-B	11
								4-C	10
レベル3							レベル3	3-A	9
								3-B	8
								3-C	7
レベル2							レベル2	2-A	6
								2-B	5
								2-C	4
レベル1							レベル1	1-A	3
								1-B	2
								1-C	1

### (1) 学力のレベル

全ての問題に難易度を設定し、「どのくらい難しい問題を解く力があるか」を「学力のレベル」で表す。「学力のレベル」はレベル1からレベル12までであるが、測定は各学年7つのレベルで行う。なお、福島県で中学3年生は実施しないため、「学力のレベル」はレベル11までである。

さらに、1つの「学力のレベル」は3分割され、「学力の伸び」が詳細に分かる。例えば、同じレベル5でも、「学力のレベル」が高くなるとバーの位置が上がる。



### (2) 学力の伸び

集計対象となる児童生徒の「学力のレベル(3分割)」を数値化し、前回調査との差を計算する(例: 1-Cは“1”、11-Aは“33”)。

### (3) 「学力が伸びた児童生徒」の定義

「学力のレベル(3分割)」を数値化した数値が、前年度から1以上増加した児童生徒を「学力が伸びた児童生徒」と捉える。

## 2 調査結果から見える県全体としての傾向

### 1 教科に関する調査の結果から

#### 【国語】

#### (1) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化 (P7)

- 全ての学年において、令和4年度調査から数値が1～4上がっており、着実に学力が伸びている。
- どの学年も、約6割から8割の児童生徒が、令和4年度調査から学力を伸ばしている。
- 学年が上がるにつれて数値の伸び幅が小さくなっている。

#### (2) 県全体の「学力のレベル」の分布 (P8～9)

- 年度の異なる同じ学年集団の経年比較から、小学4年生、小学5年生は「学力のレベル」の平均の位置が、令和4年度から1つ上がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較から、小学校6年生、中学校1年生は、「学力のレベル」の平均の位置が、令和4年度から1つ上がり、小学校5年生は2つ上がっている。
- 同じ学年集団の経年比較から、中学校1年生、中学校2年生においては、最下位レベルの割合が多くなっている。

#### (3) 県全体の「学力の伸び」の状況 (P12～13)

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、前年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 中学校1年生、中学校2年生においては、上位から25%～75%に位置する生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の生徒の「学力の伸び」が少ない。

全ての学年において、年々着実に学力が伸びている。また、どの学年も、約6割から8割の児童生徒が、令和4年度調査から学力を伸ばしている。

一方、学年が上がるにつれて数値の伸び幅が小さくなっていることや、中位層の生徒の「学力の伸び」が少ないことから、国語科の学習を通して「何ができるようになるか」が児童生徒にとって不明確であり、主体的な学びが実現できていない可能性がある。改めて学習指導要領改訂の趣旨や各領域の指導事項の意図するところを確認し、「何ができるようになるか」を児童生徒と共有することが大切である。併せて、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を具体的に示し、児童生徒が見通しをもって主体的に学ぶことができるようにすることも求められる。

## 【算数・数学】

### (1) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化 (P7)

- 小学校5年生、小学校6年生において、令和4年度調査から数値が1～2上がっており、学力が伸びている。
- 中学校1年生、中学校2年生においては、昨年度と同じ数値であり、学力が伸びていない。
- どの学年も、6割前後の児童生徒が、令和4年度調査から学力を伸ばしている。

### (2) 県全体の「学力のレベル」の分布 (P10～11)

- 年度の異なる同じ学年集団の経年比較から、小学校6年生は「学力のレベル」の平均の位置が、令和4年度から1つ下がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較から、小学校5年生は「学力のレベル」の平均の位置が、令和4年度から1つ上がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較から、全ての学年において、上位レベルに属する児童生徒の割合が少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合が多くなる傾向がある。

### (3) 県全体の「学力の伸び」の状況 (P14～15)

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、前年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 全ての学年において、上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の児童生徒の「学力の伸び」が少ない。

学年によって伸び幅の違いはあるものの、小学校においては、年々学力が伸びているが、中学校においては学力の伸びが見られない。また、どの学年も、6割前後の児童生徒が、令和4年度調査から学力を伸ばしている。

一方、学年が上がるにつれて、中央のレベルより下位の児童生徒の割合が多くなっていく。このことから、早い段階でつまづきを解消できるよう、児童生徒一人一人がどのようなつまづきをしているのかを分析し、具体的な支援を行うなど、個別最適化された学びを実現することが求められる。

## 2 児童生徒質問紙調査と学力の関係から (P16～21)

### 【「学力のレベル」の高さと関係が見られた回答】

#### (1) 授業に関すること

- 授業で学習の見通しを持つことや、話し合い活動で自分の考えを持つこと、学習内容のつながりを明確にすることがあったとする回答。

#### (2) 学習意欲や学習環境に関すること

- 学習の準備を整え、授業に臨むことができているとする回答。
- 教師及び他の児童生徒から認められたことがよくあるとする回答。
- 教師の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表することができるという回答。

#### (3) 家庭での生活に関すること

- 中学生において、土曜日や日曜日など学校が休みの日に勉強する時間が長いとする回答。
- 読書の冊数が多いとする回答。
- 家庭にある本の冊数が多いとする回答。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、学習意欲や自己肯定感の醸成などにつながる学級経営、家庭学習の充実等は学力向上に与える影響がある。引き続き、「ふくしまの『授業スタンダード』」を活用した授業改善、一人一人の児童生徒を大切にされた学級経営、「ふくしまの『家庭学習スタンダード』」を基にした自己マネジメント能力の育成を通して、児童生徒の資質・能力の育成を図っていくことが重要である。

上記の結果は、県全体としての傾向であり、そのまま各自治体や各学校・各学級においても同じであるとは限らない。県全体としての傾向を参考にしつつ、各自治体や各学校に送付されている結果帳票を活用し、詳細に分析することが重要である。その分析結果から実態を捉え、授業の質の向上や望ましい学級集団づくり等に生かしていくことで、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばしていくことが期待できる。

### 3 教科に関する調査の結果

#### (1) 県全体の平均正答率(%)と「学力のレベル」

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
国語	63.8	62.3	61.3	64.3	60.8
	6-C(16)	7-C(19)	7-A(21)	8-C(22)	8-B(23)
算数 数学	63.2	62.2	56.8	56.8	56.3
	5-C(13)	6-C(16)	6-B(17)	7-C(19)	7-A(21)

上段：平均正答率(%) 下段：平均の学力のレベル(数値)

#### (2) 県全体のカテゴリー別平均正答率(%)

##### 【国語】

	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別平均正答率		問題形式別平均正答率	
	言葉の使い方	我が国の文化情報	読むこと、書くこと、話すこと	読むこと	知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式
小学校4年	68.2	63.1	51.4	60.3	66.9	54.7	65.4	59.8
小学校5年	68.1	62.3	62.8	48.6	66.2	54.3	63.5	57.4
小学校6年	72.0	45.8	51.8	55.2	67.4	54.0	61.8	59.8
中学校1年	70.3	42.7	58.5	71.6	62.6	66.6	65.2	59.4
中学校2年	54.3	66.5	71.7	61.9	58.9	64.8	60.2	66.8

##### 【算数・数学】

	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別平均正答率		平均正答率 問題形式別	
	数と計算	図形	測定(小4)変化と関係(小5・中1)	データの活用	知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式
小学校4年	71.1	55.6	55.6	61.3	66.5	49.4	64.0	62.5
小学校5年	60.9	61.3	63.9	65.9	63.5	59.4	62.9	61.2
小学校6年	60.2	60.9	54.1	44.7	59.2	47.7	58.6	53.5
中学校1年	60.2	50.1	57.5	62.7	56.2	58.5	62.2	50.3
	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別平均正答率		平均正答率 問題形式別	
	数と式	図形	関数	データの活用	知識・技能	思考・判断・表現	選択式	短答式
中学校2年	58.1	46.6	62.2	62.2	59.3	47.2	58.7	53.1

### (3) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化

#### ○ 国語

学年	小4	小5	小6	中1	中2
現中2	H31 1 6	R2 中止	R3 2 0	R4 2 2	R5 2 3
現中1	R2 中止	R3 1 8	R4 2 0	R5 2 2	
現小6	R3 1 8	R4 1 8	R5 2 1		
現小5	R4 1 5	R5 1 9			
現小4	R5 1 6				

#### ○ 算数・数学

学年	小4	小5	小6	中1	中2
現中2	H31 1 5	R2 中止	R3 1 8	R4 2 1	R5 2 1
現中1	R2 中止	R3 1 6	R4 1 9	R5 1 9	
現小6	R3 1 4	R4 1 6	R5 1 7		
現小5	R4 1 4	R5 1 6			
現小4	R5 1 3				

※ 表の中の数値は、児童生徒の「学力のレベル（3分割）」を数値化したものである。

※ 横に見ると「同じ学年集団」を、縦に見ると「年度の異なる同じ学年」を比較することができる。

#### ○ 令和4年度調査から学力が伸びた児童生徒の割合（％）（県全体）

	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
国語	85.9	81.3	62.4	64.9
算数・数学	69.3	63.9	54.9	53.9

※ 小学校4年生の学力の伸びが見られるのは、令和6年度調査実施後となる。

#### 【国語】

##### （同じ学年集団の経年比較）

- 全ての学年において、令和4年度調査から数値が1～4上がっており、着実に学力が伸びている。
- どの学年も、約6割から8割の児童生徒が、令和4年度調査から学力を伸ばしている。
- 学年が上がるにつれて数値の伸び幅が小さくなっている。

##### （年度の異なる同じ学年の比較）

- 中学校1年生は前年度と同じ数値である。小学校4年生、小学校5年生、小学校6年生は前年度より数値が1高くなっている。

#### 【算数・数学】

##### （同じ学年集団の経年比較）

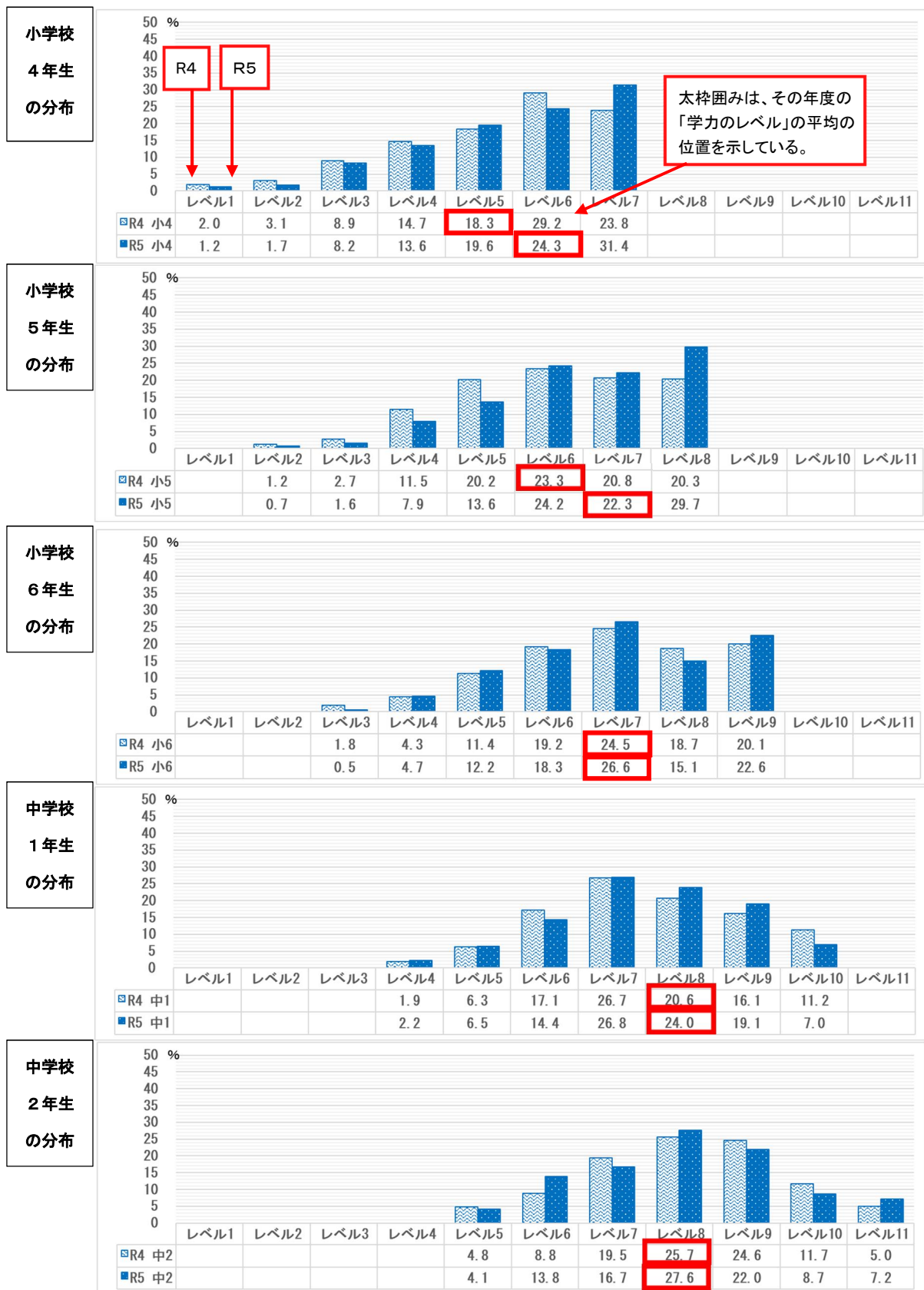
- 小学校5年生、小学校6年生において、令和4年度調査から数値が1～2上がっており、学力が伸びている。
- 中学校1年生、中学校2年生においては、昨年度と同じ数値であり、学力が伸びていない。
- どの学年も、6割前後の児童生徒が、令和4年度調査から学力を伸ばしている。

##### （年度の異なる同じ学年の比較）

- 小学校5年生は前年度と同じ数値である。小学校4年生、小学校6年生、中学校1年生は前年度より数値が1～2低くなっている。

## (4) 県全体の「学力のレベル」の分布 ① 国語

### 【年度の異なる同じ学年の比較（国語）】

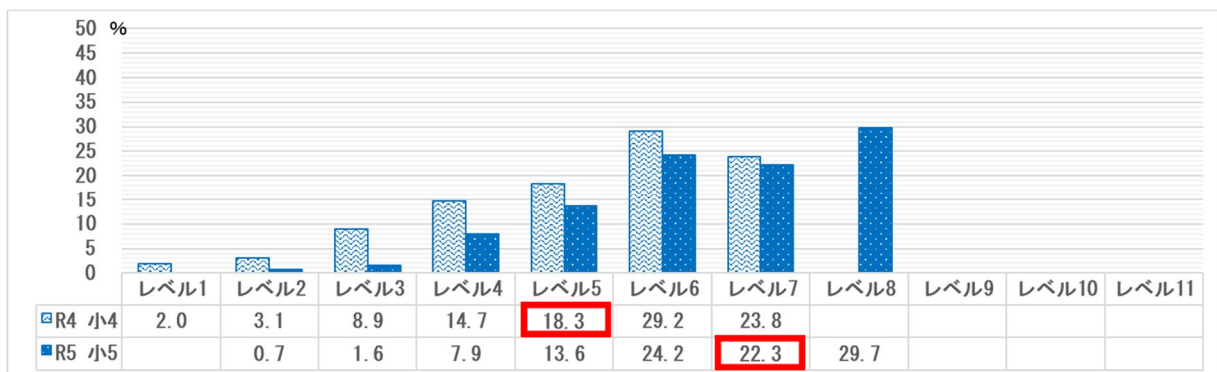


※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

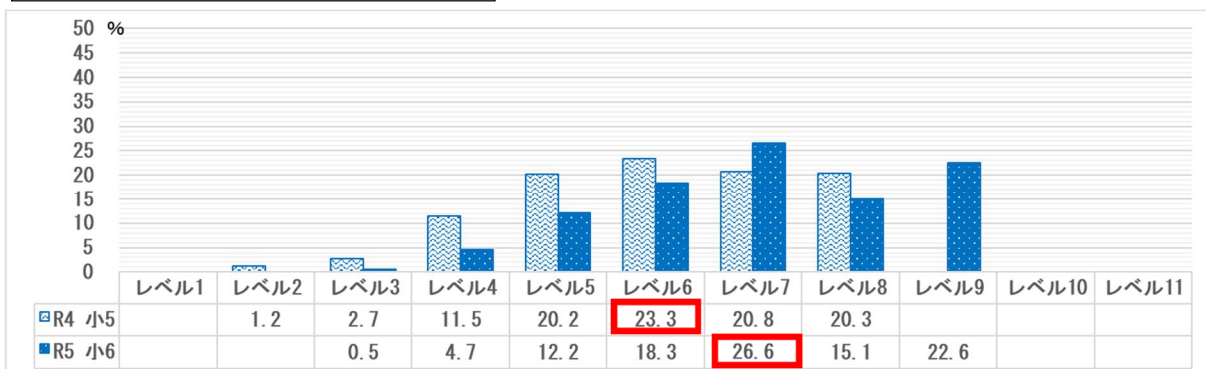


## 【同じ学年集団の経年比較（国語）】

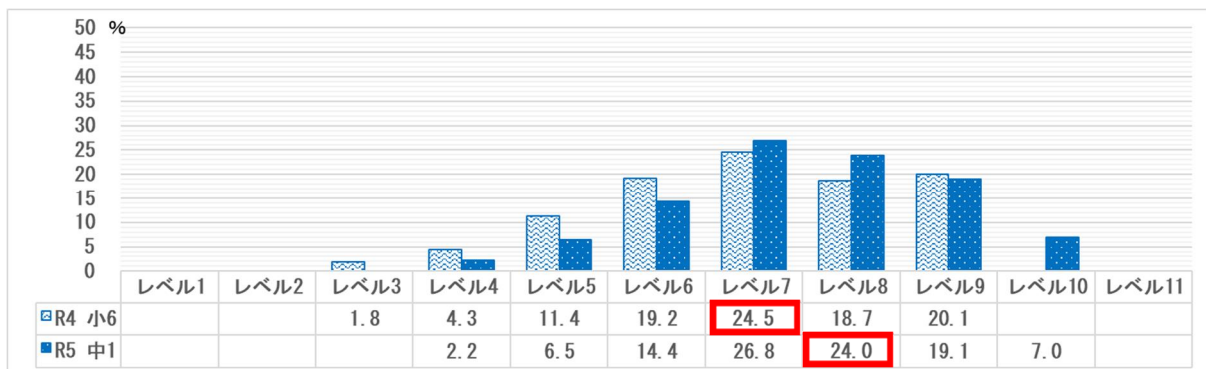
R4 小学校4年生 → R5 小学校5年生



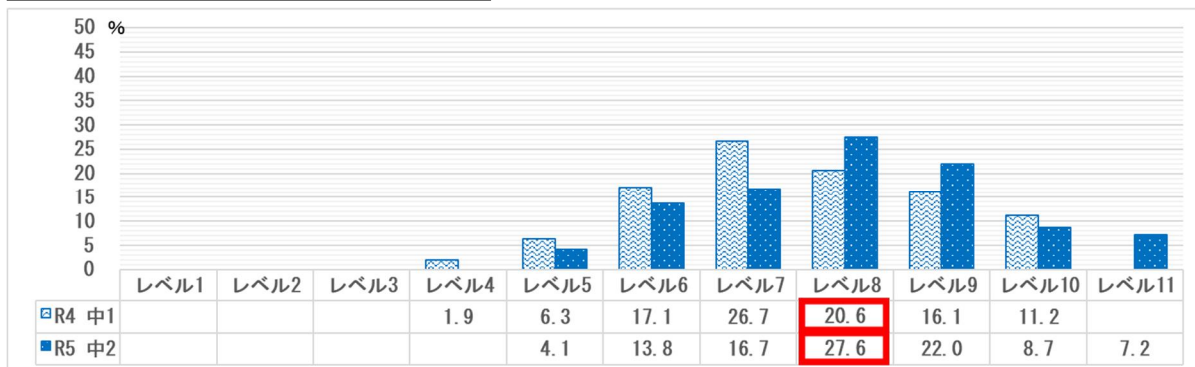
R4 小学校5年生 → R5 小学校6年生



R4 小学校6年生 → R5 中学校1年生

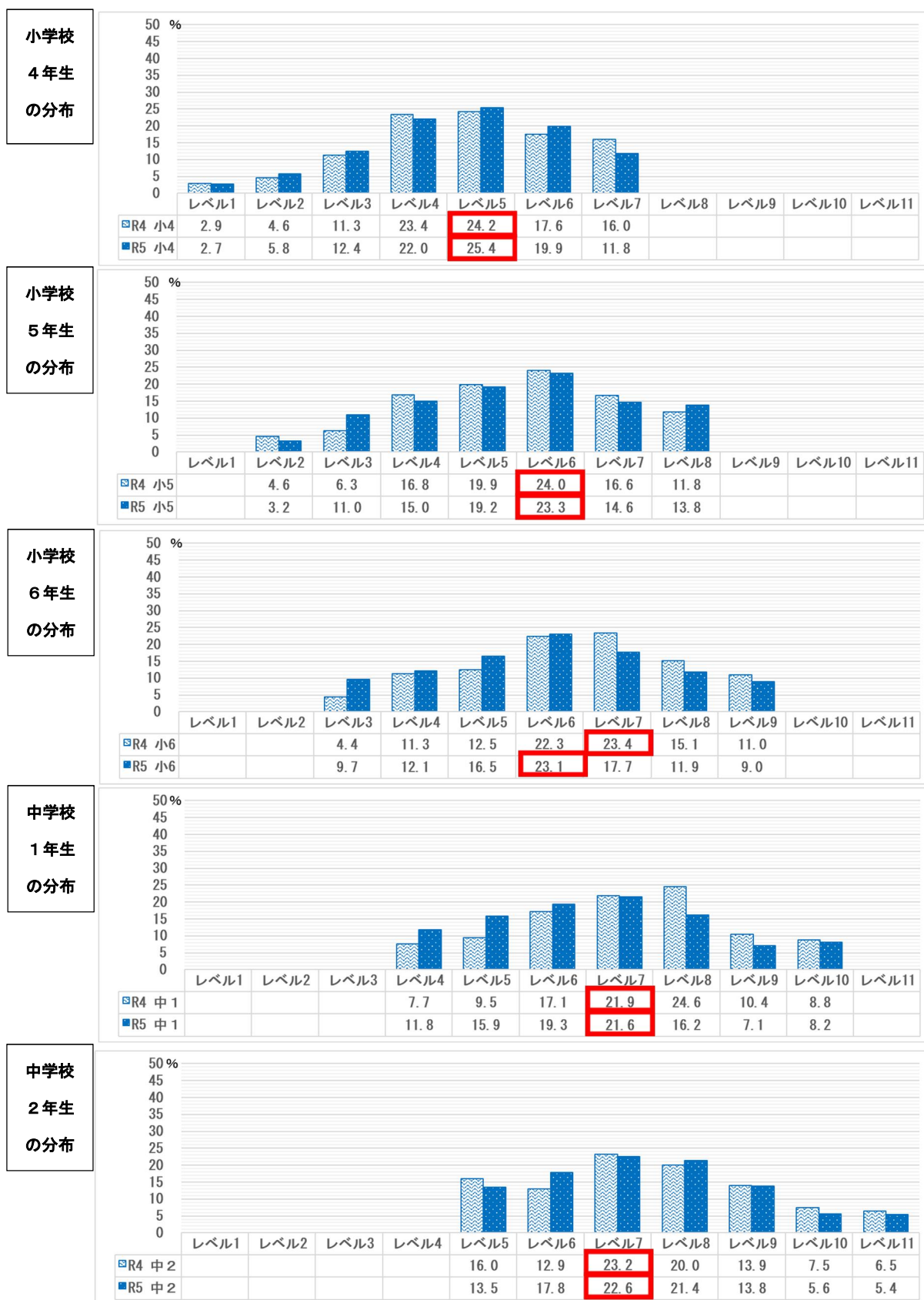


R4 中学校1年生 → R5 中学校2年生



## (4) 県全体の「学力のレベル」の分布 ② 算数・数学

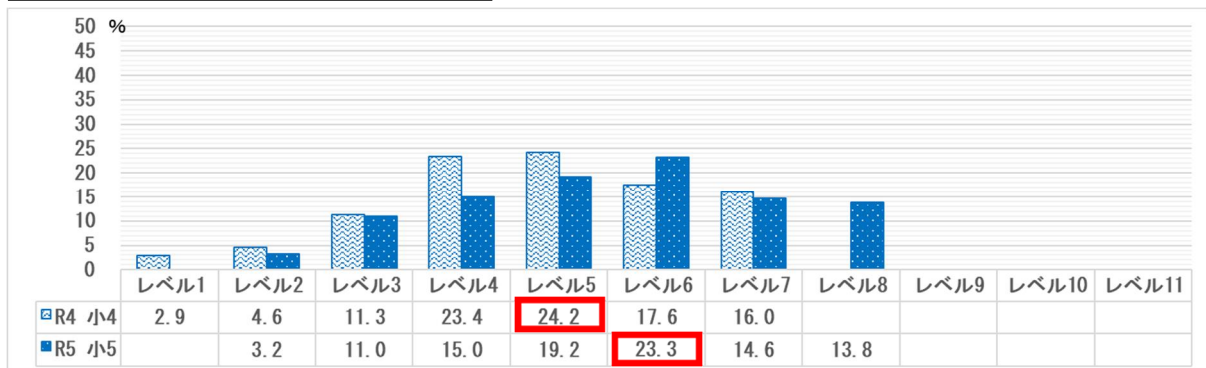
### 【年度の異なる同じ学年の比較（算数・数学）】



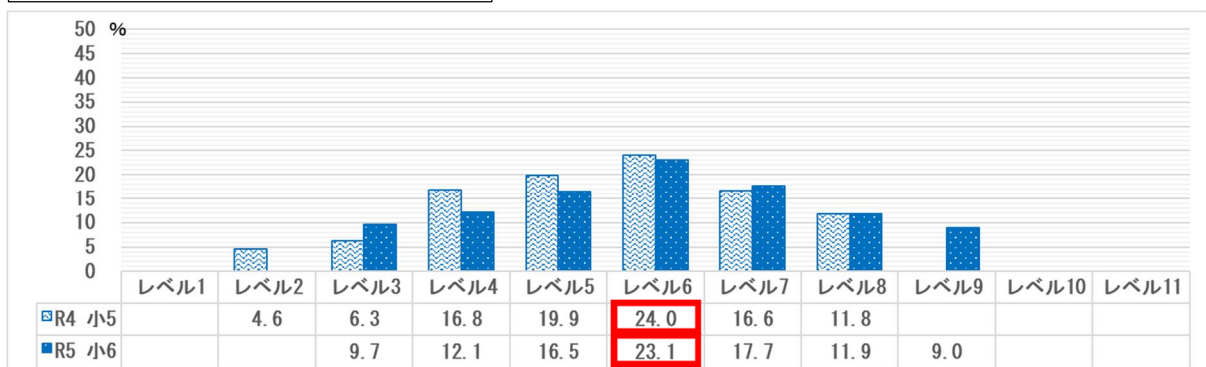
※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

## 【同じ学年集団の経年比較（算数・数学）】

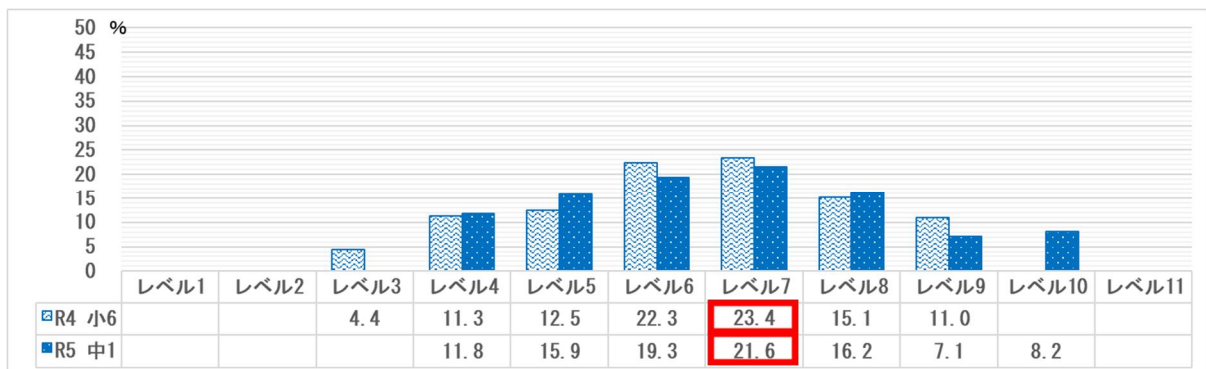
R4小学校4年生 → R5小学校5年生



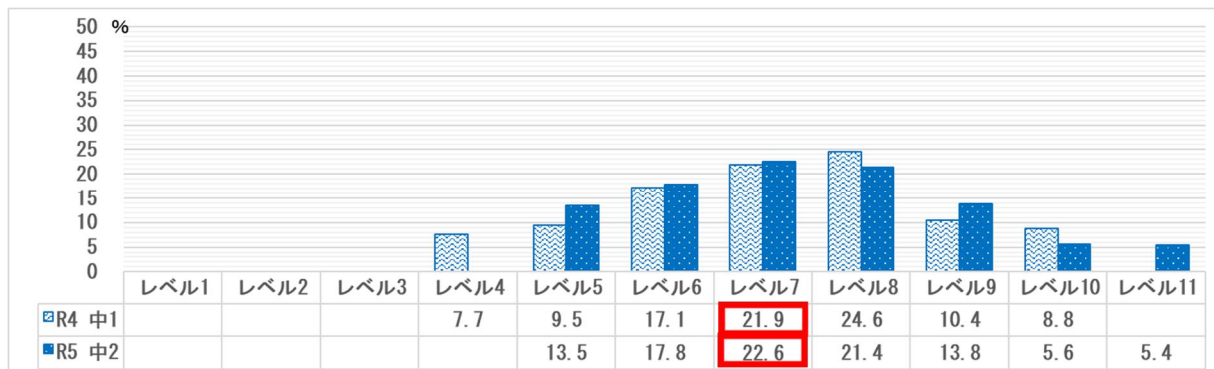
R4小学校5年生 → R5小学校6年生



R4小学校6年生 → R5中学校1年生



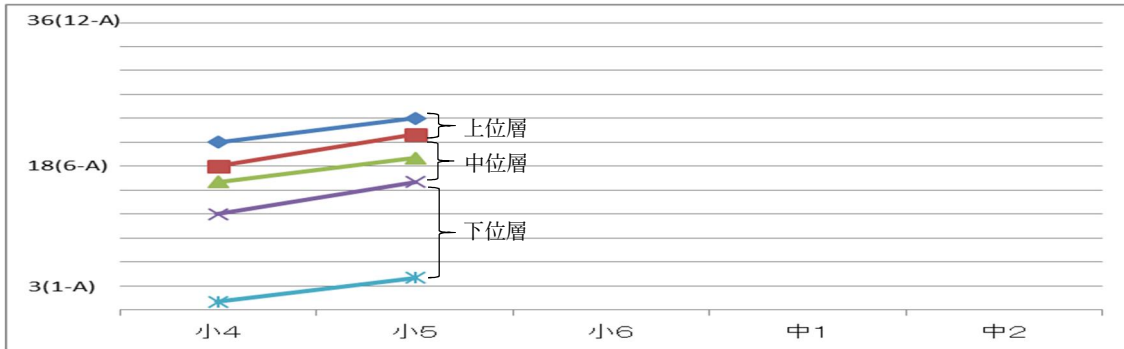
R4中学校1年生 → R5中学校2年生



## (5) 県全体の「学力の伸び」の状況 ① 国語

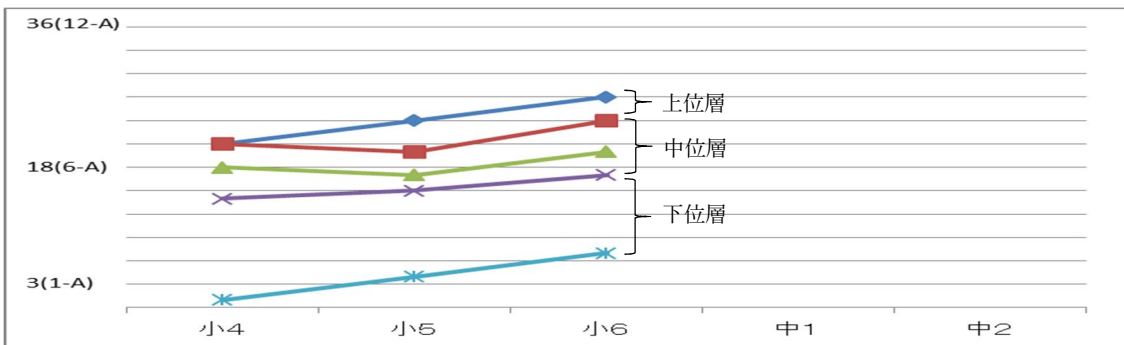
### 【現小学校5年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	—	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	18	22	—	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	16	19	—	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	12	16	—	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	—	—	—



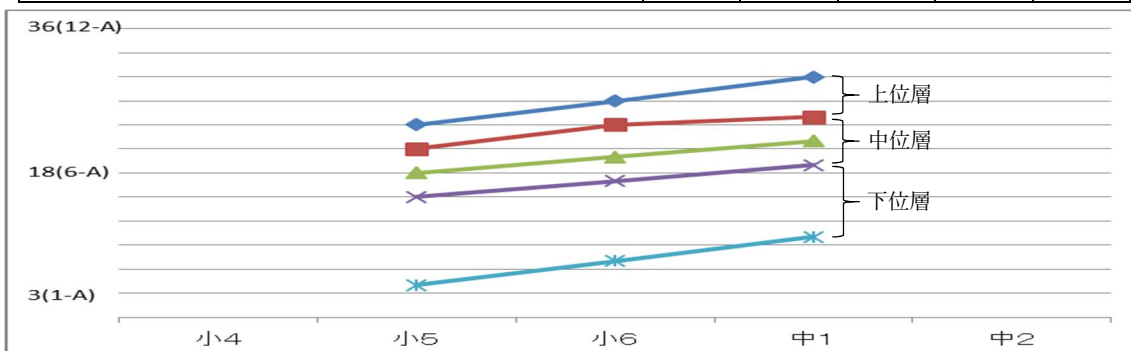
### 【現小学校6年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	27	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	21	20	24	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	18	17	20	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	14	15	17	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	7	—	—



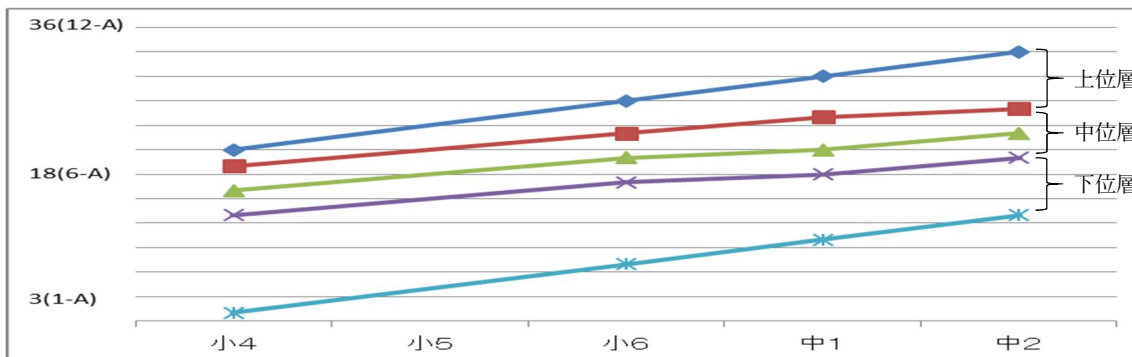
### 【現中学校1年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	—	24	27	30	—
上位から25%に位置する生徒が属するレベル	—	21	24	25	—
中央に位置する生徒が属するレベル	—	18	20	22	—
上位から75%に位置する生徒が属するレベル	—	15	17	19	—
最下位の生徒が属するレベル	—	4	7	10	—



【現中学校2年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	21	—	27	30	33
上位から25%に位置する生徒が属するレベル	19	—	23	25	26
中央に位置する生徒が属するレベル	16	—	20	21	23
上位から75%に位置する生徒が属するレベル	13	—	17	18	20
最下位の生徒が属するレベル	1	—	7	10	13



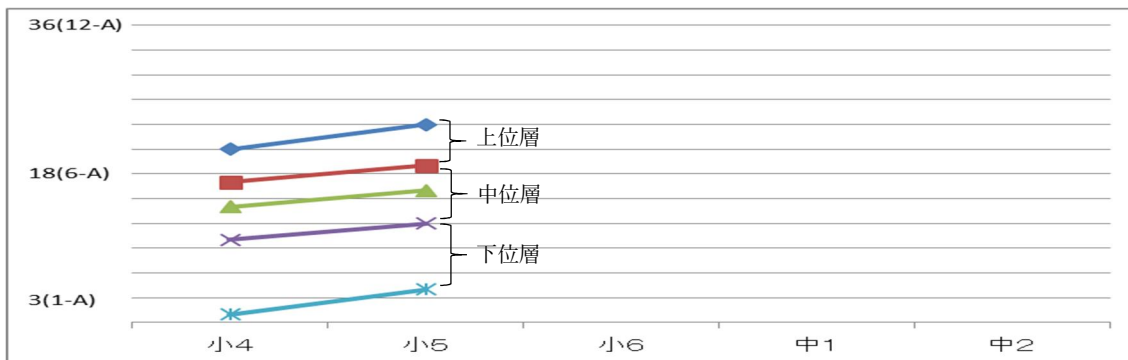
【国語】

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、前年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 中学校1年生、中学校2年生においては、上位から25%～75%に位置する生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の生徒の「学力の伸び」が少ない。

## (5) 県全体の「学力の伸び」の状況 ② 算数・数学

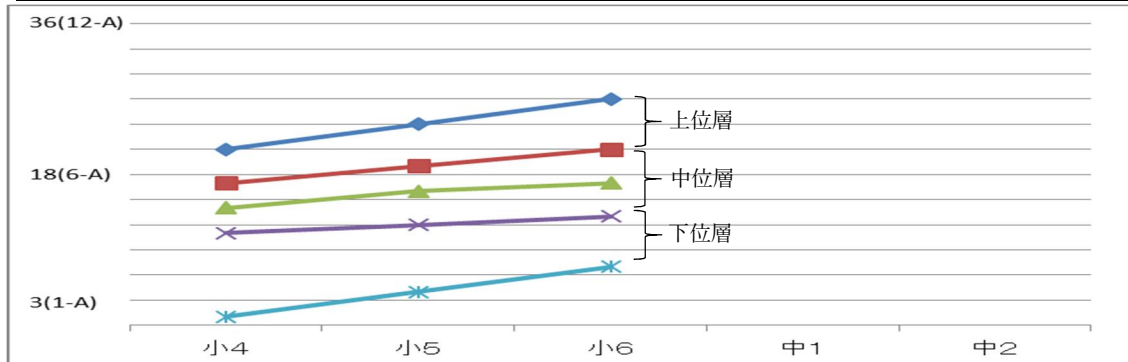
### 【現小学校5年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	—	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	17	19	—	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	14	16	—	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	10	12	—	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	—	—	—



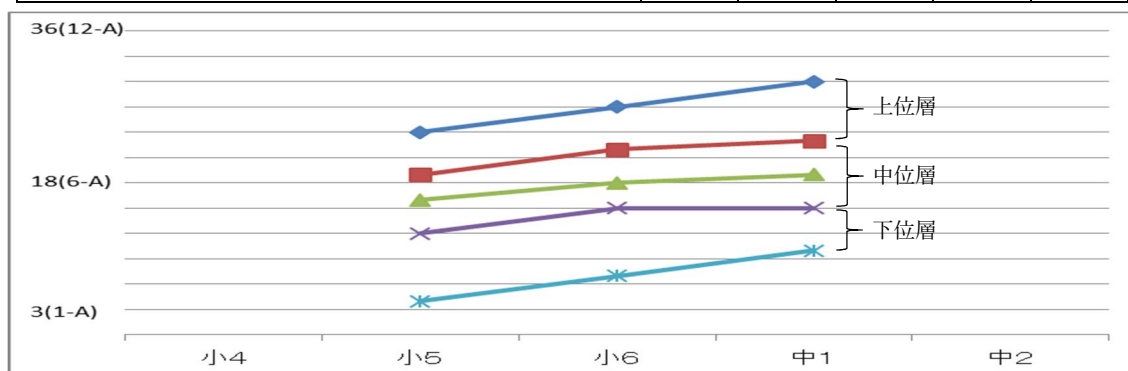
### 【現小学校6年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	27	—	—
上位から25%に位置する児童が属するレベル	17	19	21	—	—
中央に位置する児童が属するレベル	14	16	17	—	—
上位から75%に位置する児童が属するレベル	11	12	13	—	—
最下位の児童が属するレベル	1	4	7	—	—



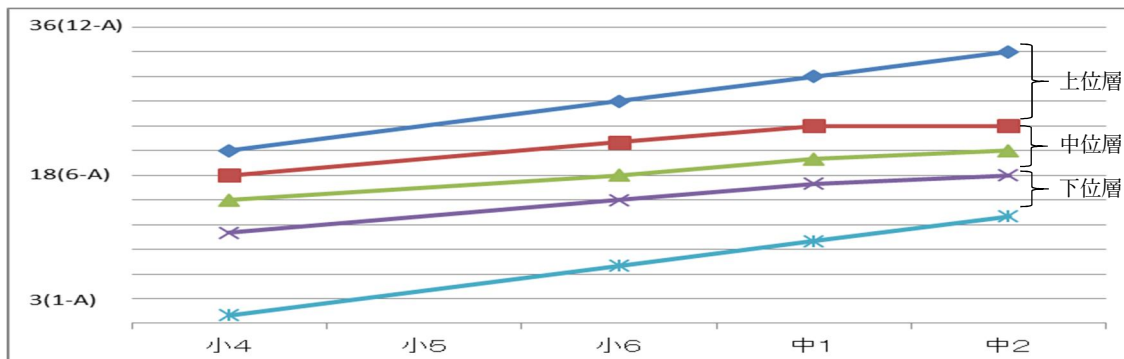
### 【現中学校1年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	—	24	27	30	—
上位から25%に位置する生徒が属するレベル	—	19	22	23	—
中央に位置する生徒が属するレベル	—	16	18	19	—
上位から75%に位置する生徒が属するレベル	—	12	15	15	—
最下位の生徒が属するレベル	—	4	7	10	—



【現中学校 2 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	21	—	27	30	33
上位から 25%に位置する生徒が属するレベル	18	—	22	24	24
中央に位置する生徒が属するレベル	15	—	18	20	21
上位から 75%に位置する生徒が属するレベル	11	—	15	17	18
最下位の生徒が属するレベル	1	—	7	10	13



【算数・数学】

- 全ての学年において、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルは、前年度調査と比べて数値が3上がっており、着実に学力が伸びている。
- 全ての学年において、上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベルが、最上位及び最下位の児童生徒が属するレベルほど上がっておらず、中位層の児童生徒の「学力の伸び」が少ない。



## 4 児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」

### (1) 授業に関すること

- 学習の見通しを持つことや、話し合い活動で自分の考えを持つこと、学習内容のつながりを明確にすることと「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、学力向上に寄与している。

- ◎ 授業の始めに追究・解決への見通しを持たせることが、「主体的な学び」への原動力となるとともに、学習内容の定着につながる。
- ◎ 話し合い活動を取り入れる際には、目的や論点を明確にし、他の児童生徒と考えを共有したり比較・検討したりするように働きかけることが大切である。また、自分の考えをもう一度整理し、表現する時間を確保することも大切である。
- ◎ 「まとめ・振り返り」において、学びを深め、次の「学びへ向かう力」を育成するために、「何を学習したか」「どのように学習してきたか」とともに既習事項との関連を図ることも大切である。

#### 【ふくしまの「授業スタンダード」より】

- ・ 「何を学習するか」「何ができればよいか」を明確にするために、「問い」や「思い・願い」を基に子どもたちの発言等をつないで焦点化し、学習課題を設定しましょう。
- ・ 思いや考えを広げ深めることができるようにするために、児童生徒の考えを基に話し合いをコーディネートし、ねらいに迫りましょう。
- ・ 学習した知識・技能を活用する活動を設定するなど「何を学習したか」をまとめたり、板書やノートなどを基に「どのように学習してきたか」を振り返ったりしましょう。

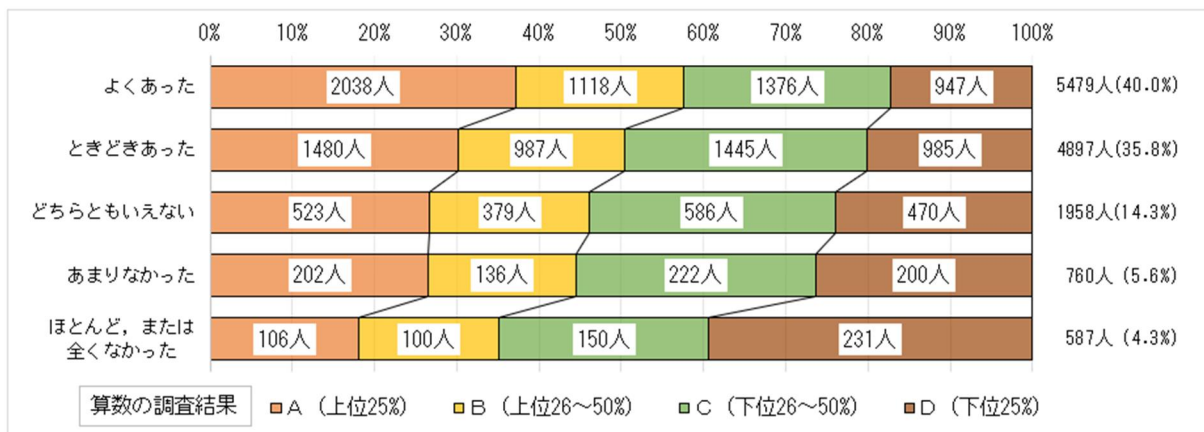
### <児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」の階層のクロス集計結果から>

縦軸：質問『授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだことがありましたか』

横軸：『算数・数学の調査結果』（小4）

#### 小学校4年生 算数

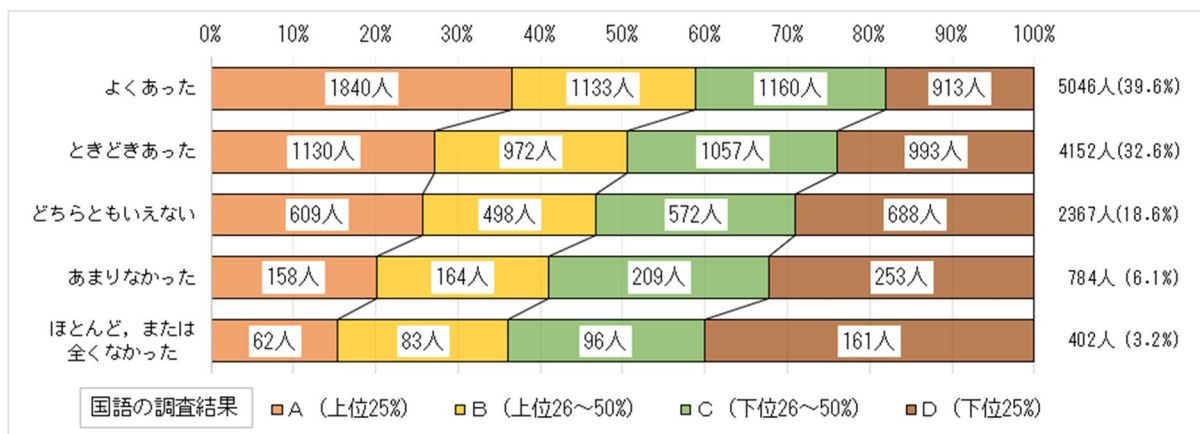
※ クロス集計の結果は、代表的な学年・教科を取り上げています。他の学年・教科のクロス集計結果は、後日福島県教育委員会のホームページに掲載予定の「ふくしま学力調査分析報告書」をご覧ください。





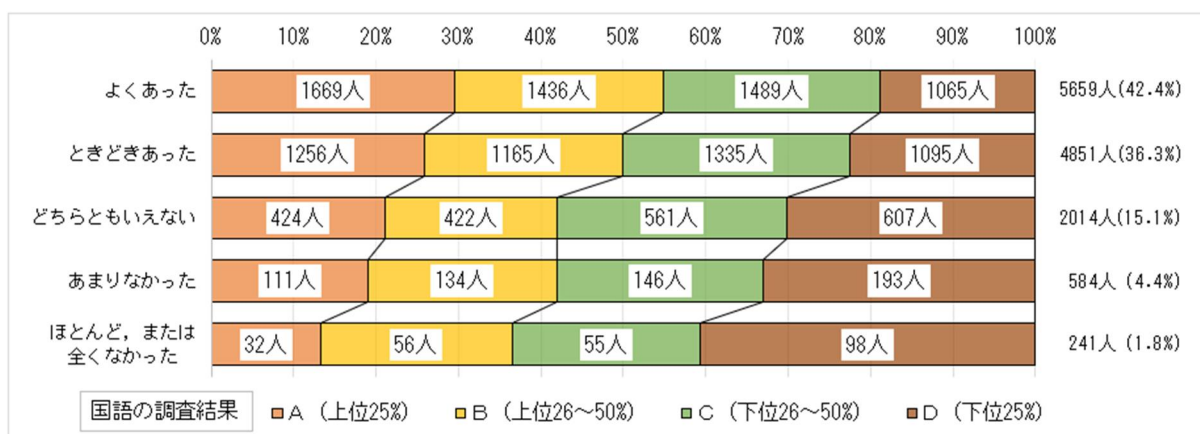
縦軸：質問『課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりと持てるようになったことがありましたか』  
 横軸：『国語の調査結果』（小5）

小学校5年生 国語



縦軸：質問『授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながったことがありましたか』  
 横軸：『国語の調査結果』（中1）

中学校1年生 国語



※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

## (2) 学習意欲や学習環境に関すること

- 学習の準備を整える等の授業に臨む心構えや、他の児童生徒及び教師から認められる等の自己肯定感と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 教師の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表する等の学習習慣や学ぼうとする意欲（非認知能力の一つ）と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。

- ◎ 授業に臨む心構えを大切にさせ、始業前に学習用具を準備させる等のよりよい学習習慣や学習に対する前向きな姿勢を育てることが重要である。
- ◎ 学級経営において、教師が積極的に児童生徒のよいところをほめたり、児童生徒同士が互いのよさを認め、高め合う雰囲気醸成したりすることにより、達成感を得たり、自己肯定感を高めたりすることが学力向上につながると考えられる。
- ◎ 児童生徒が友達の発表を聞き、自分の考えを相手に伝えるためには、教師は「何について話し合っているか」や「何を学んだか」が児童生徒にとって明確になるように発問を工夫する必要があると考えられる。

### 【ふくしまの「授業スタンダード」より】

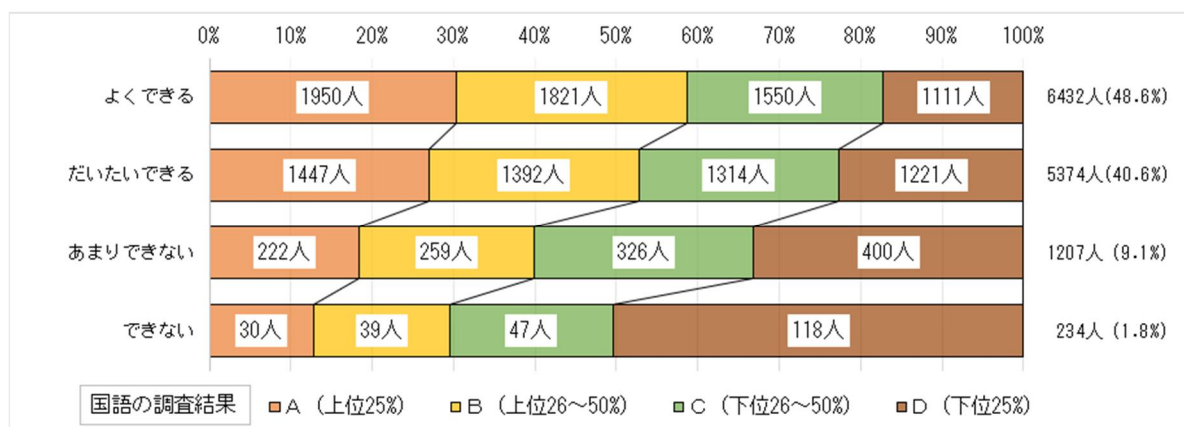
- ・ 学習規律について、発達段階を踏まえて共通実践することを大切にしましょう。
- ・ 普段の学校生活全般において、教師と子ども、子ども同士の「望ましい人間関係」を築いていくことを大切にしましょう。
- ・ 発達段階に応じて、児童生徒にどのような活動を通してどこまで考えさせるかを明確にした授業づくりを大切にしましょう。

### <児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」の階層のクロス集計結果から>

縦軸：質問『授業の前に、机の上に学習用具をそろえることができますか  
(学習の準備を整え、授業に臨むことができますか)』

横軸：『国語の調査結果』(小6)

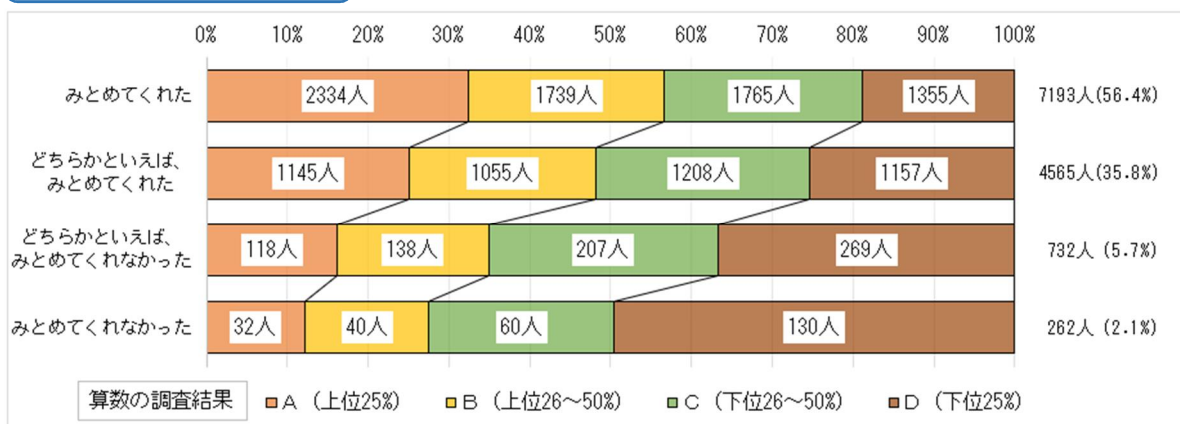
#### 小学校6年生 国語



※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

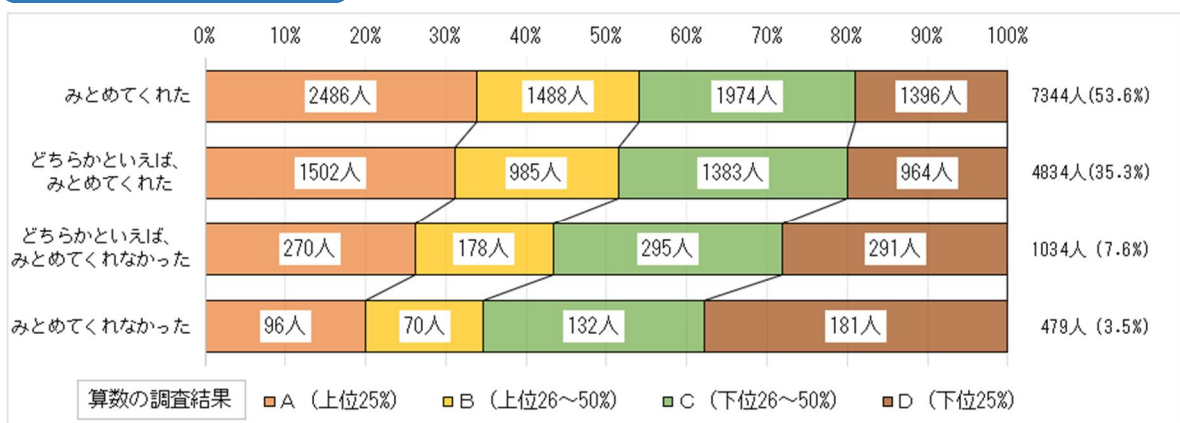
縦軸：質問『学校の先生たちは、自分のよいところを認めてくれましたか』  
横軸：『算数・数学の調査結果』（小5）

小学校5年生 算数



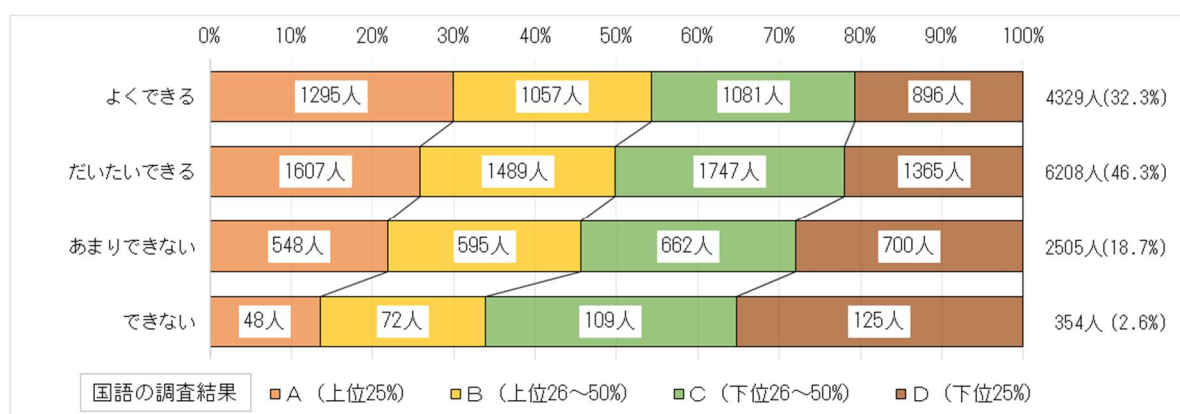
縦軸：質問『学校の友達は、自分のよいところを認めてくれましたか』  
横軸：『算数・数学の調査結果』（小4）

小学校4年生 算数



縦軸：質問『先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表する（考えを伝える）  
ことができているか』  
横軸：『国語の調査結果』（中1）

中学校1年生 国語



### (3) 家庭での生活に関すること

- 特に中学校において、土曜日や日曜日など学校が休みの日に、勉強する時間（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む。）の長さとして「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 読書の冊数と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。また、家庭にある本の冊数と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。

- ◎ 土曜日や日曜日など休日における家庭学習の時間の確保に加えて、その内容や方法を工夫し、その取組を振り返り見直す機会を設ける等、学校と家庭・地域の連携を図りながら児童生徒の自己マネジメント力を育てていくことが大切である。
- ◎ 家族と一緒に読書に親しむ機会を増やすことや、読書環境を整えることなど、引き続き読書量を増やす取組をすることは、学力の向上に寄与するものである。加えて、どのような本を読むかという点に着目し、地域の図書館なども活用し、幅広い読書活動を促すことも大切である。

#### 【ふくしまの「家庭学習スタンダード」より】

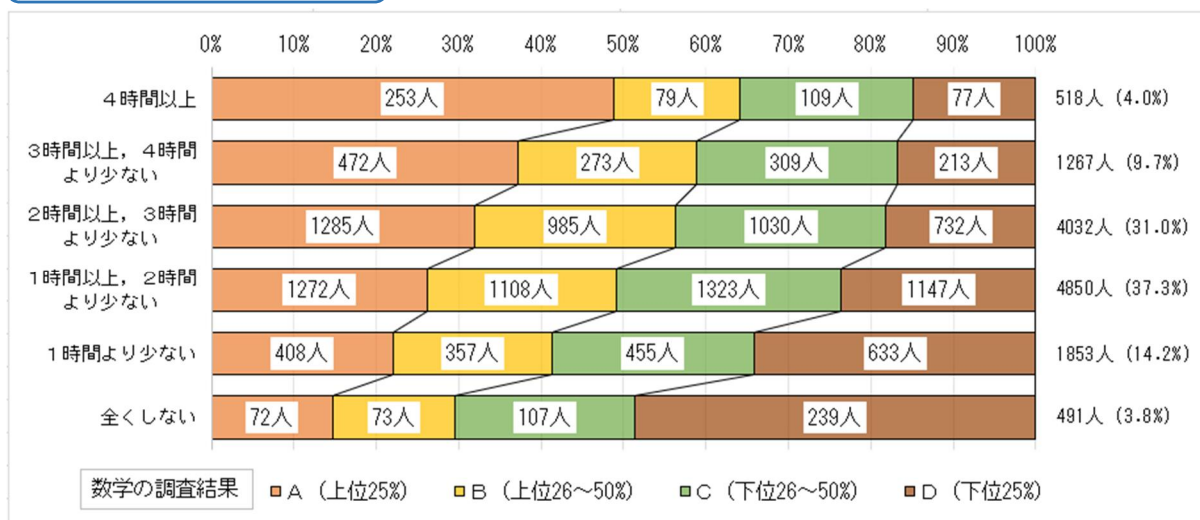
- ・ 学習内容に応じて宿題（復習、予習）を効果的に活用した授業に努めたり、授業で学習したことを活用できる場面や方法を紹介したりするなど、授業と家庭学習をつなげましょう。
- ・ 「心の支え」、「環境づくり」、「習慣づくり」の3つの視点で家庭・地域と協力・連携体制を築いて、「自己マネジメント力」を育てていきましょう。  
(家庭への働きかけとして)
- ・ 「環境づくり」の視点から、集中して学習できる環境を作ったり、家族と一緒に読書する機会を設けたりしていきましょう。
- ・ 「習慣づくり」の視点から、テレビやゲーム、スマホなどをするときのルールを決めましょう。また、「起床時刻」や「就寝時刻」、「学習を始める時刻」等の約束ごと、保護者と児童生徒が話し合い、家族みんなで規則正しい生活を心がけましょう。

#### <児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」の階層のクロス集計の結果から>

縦軸：質問『土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含みます）』

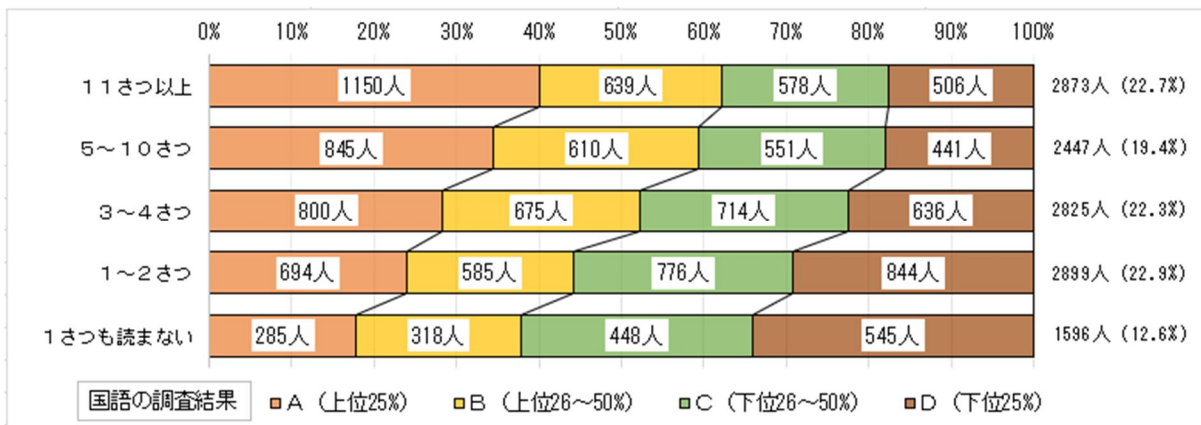
横軸：『算数・数学の調査結果』（中2）

#### 中学校2年生 数学



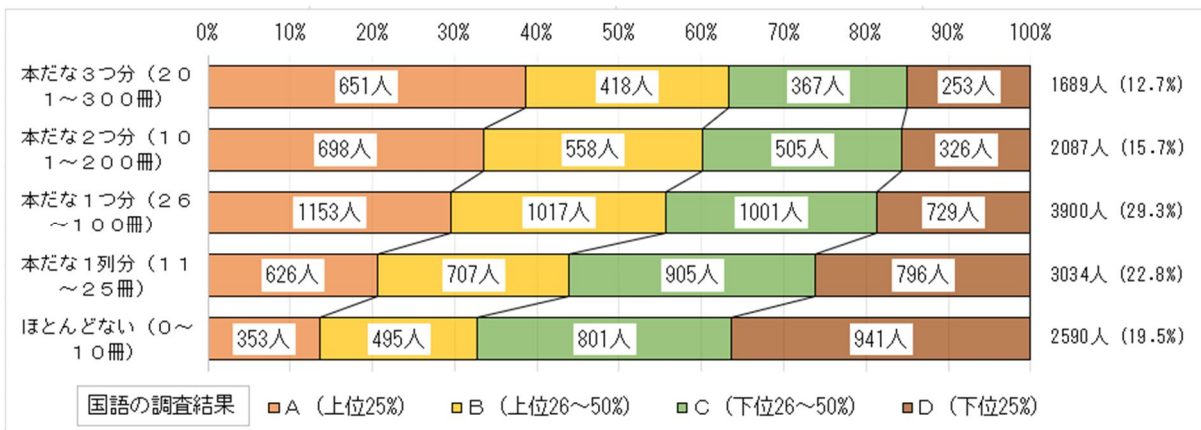
縦軸：質問『1か月に、何冊くらいの本を読みますか（教科書や参考書、まん画や雑誌は除きます）』  
 横軸：『国語の調査結果』（小5）

小学校5年生 国語



縦軸：質問『家には、自分や家の人を読む本がどれくらいありますか』  
 横軸：『国語の調査結果』（中1）

中学校1年生 国語



※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。



## 5 エビデンスに基づく授業改善に向けた支援

### 1 子ども一人一人の「学力のレベルと学力の伸び」の可視化

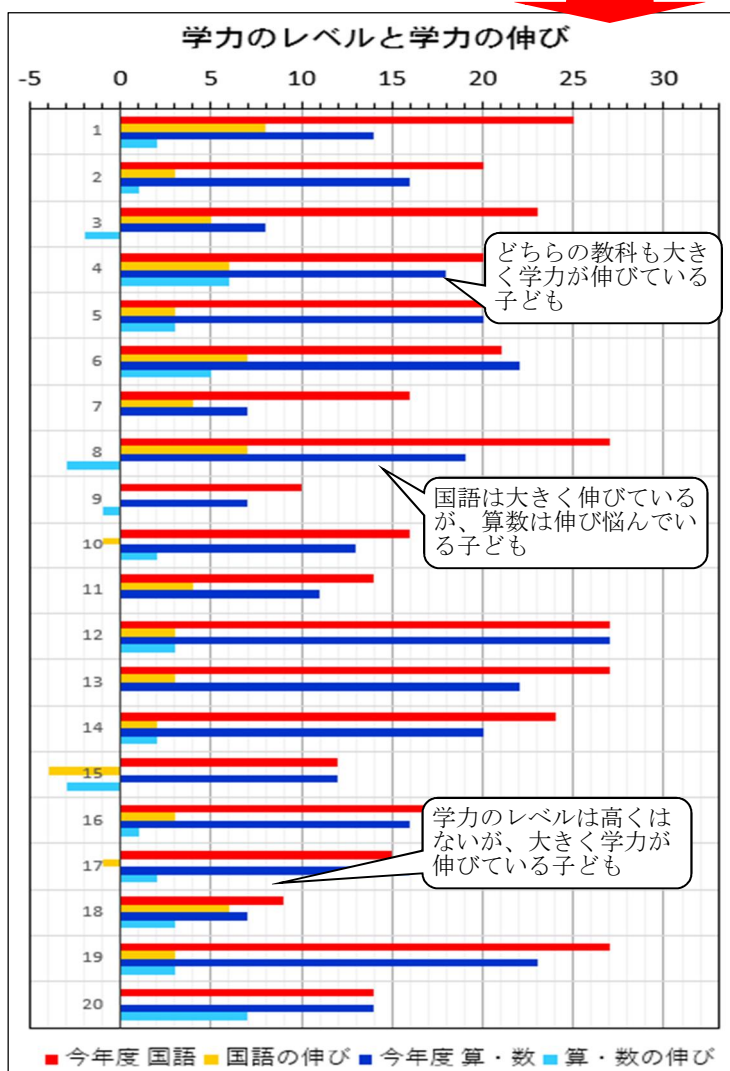
各学校に配付されている「帳票40」には、以下のとおり前年度調査の学力のレベルとの比較により、「昨年度からの学力の伸び」が数値として示されている。

40 学校用		国語		算数・数学		
令和5年度ふくしま学力調査(小学校6年生)		R4レベル	昨年度からの学力の伸び	R4レベル	昨年度からの学力の伸び	
学校平均	7-C	4	5-A	6-C	2	5-B
市町村平均	7-B	3	6-B	6-B	2	5-A
福島県平均	7-B	3	6-B	6-B	2	5-A
個人番号	301	8	6-B	5-B	2	4-A
個人番号	323	3	6-B	6-C	1	5-A
個人番号	304	5	6-A	3-B	-2	4-C
個人番号	306	6	5-B	6-A	6	4-A
個人番号	324	3	8-B	7-B	3	6-B
個人番号	307	7	5-B	8-C	5	6-B
個人番号	325	4	4-A	3-C	0	3-C
個人番号	308	7	7-B	7-C	-3	8-C
個人番号	310	4	4-C	3-C	-1	3-B
個人番号	312	-1	6-B	5-C	2	4-B

義務教育課では、「学力の伸び」から、子どもたちのどのような姿が見えてくるのか、「帳票40」の数値だけでは見えにくいので、と考へ、「学力のレベルと学力の伸び」を可視化する「グラフ化ツール」を作成し、県内すべての小・中学校、義務教育学校、県立特別支援学校小学部・中学部及び、市町村教育委員会へ配布し、「グラフ化ツール」の使い方及び活用事例についてオンライン説明会を実施した。

右のグラフは、「グラフ化ツール」によって作成された小学校6学年のグラフの例であり、子ども一人一人の国語と算数の「学力のレベル」と「昨年度からの学力の伸び」を表している。

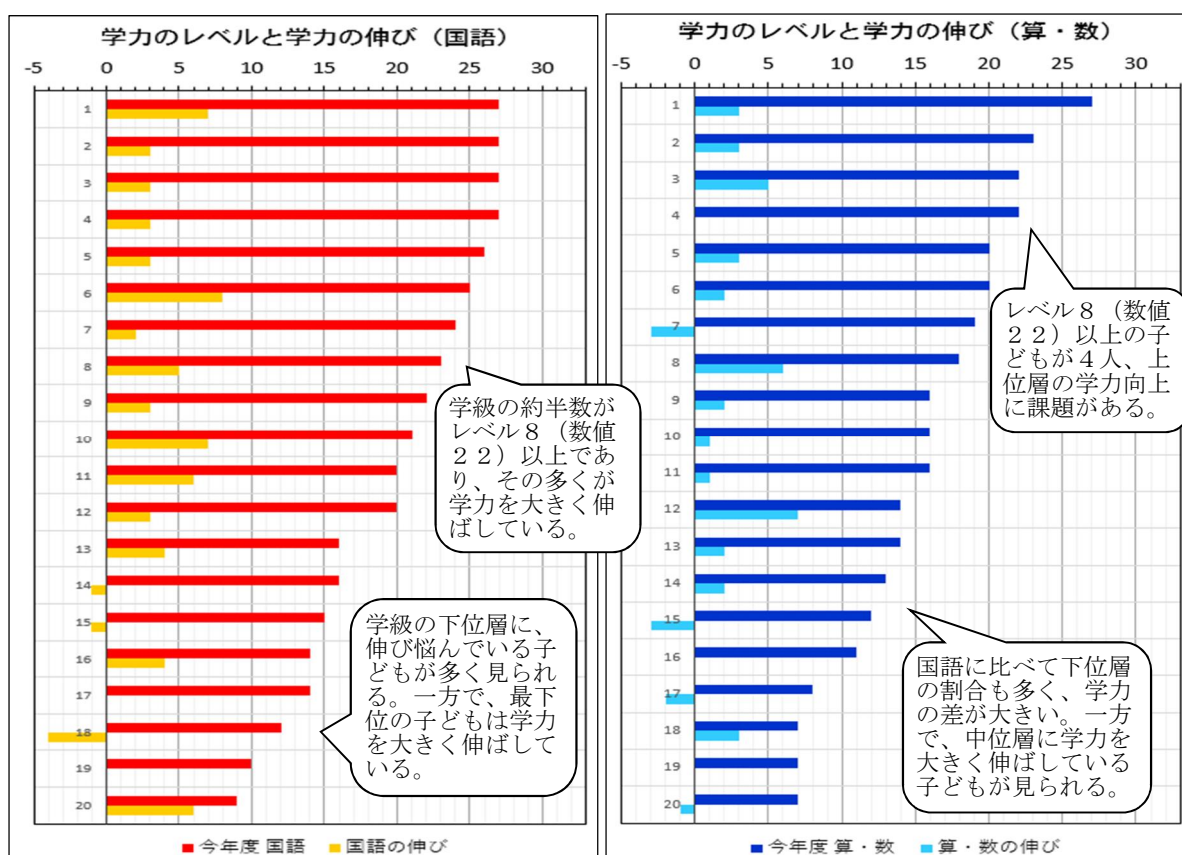
このグラフから、例えば、どちらの教科も大きく学力が伸びている子どもや、国語の学力は大きく伸びているが、算数は伸び悩んでいる子どもなど、子ども一人一人の「学力のレベル」と「昨年度からの学力の伸び」の状況が見えてくる。



これらのグラフを基に、子ども一人一人に寄り添い、称賛したり、励ましたりすることはもちろんだが、これらの結果を授業改善に生かすことが大切である。単に結果を見て、学力の状況を把握するだけでなく、例えば、学力が大きく伸びている子どもを、校内研究授業における抽出対象とし、事後研究会で学習への取組状況等を共有したり、伸び悩んでいる子どもに対する個別支援の方法を検討したりすることが考えられる。他にも、子ども一人一人にどのような変容があったのかを、生徒指導の面から話し合うことも考えられる。

## 2 エビデンスを教科指導に生かすために

子ども一人一人の学力の状況を把握すると共に、教科指導にも生かしたい。そこで、以下のように教科ごとにグラフを分けて表してみる（学力のレベルと学力の伸びの順）。



例えば、上の2つのグラフを見ると、国語においては、学級の約半数がレベル8（数値22）以上であり、その多くが学力を大きく伸ばしている。この学級での取組を互見授業等により共有することで、学校全体の授業改善が図られる。また、算数においては、レベル8（数値22）以上の子どもの数が少なく、上位層の学力向上が課題である。一方で、中位層に学力を大きく伸ばしている子どもがいることから、どのような指導が、学力の伸びによい影響を与えているかを検証し、自身の授業を振り返ることで、具体的な指導方法等の改善に繋がれると考える。

さらに、自校において、教科のどの領域、どの観点において強みや課題が見られるかについては、「帳票09」や「帳票28」から、学年全体や学級ごとの状況を把握することができる。さらには、必要に応じて「帳票01」から、子ども一人一人の採点結果を確認し、個別最適な学びに繋げることも大切である。

## 特別寄稿 分析協力者・宮城教育大学教職大学院 田端健人教授より

令和4年3月より、ふくしま学力調査等の結果分析を活用したエビデンスに基づく支援を行うため、宮城教育大学教職大学院の田端健人教授を分析協力者に招き、研究を進めている。前項で紹介した「グラフ化ツール」についても、田端教授の協力を得て作成したものである。今後も、田端教授と連携しながら、データ分析を活用したエビデンスに基づく支援を行っていく。

### 【分析協力者プロフィール】

宮城教育大学 教職大学院 教授 田端 健人 氏

<研究>※科学研究助成事業（科研費）

○研究題目「グローバル世界を視野とする学力・非認知能力の効果的学校モデル」

「学力/非認知能力を効果的に育成するスクールリーダーのデータサイエンス」

※ 本研究を進めるチームは、田端教授他7名

○研究の概要

- ・ 児童生徒の学力と非認知能力を向上させる「効果的学校」の姿を明らかにすること。
- ・ 校長のどのようなリーダーシップが、教職員のどのようなコラボレーションが、教師のどのような学級づくりや授業や支援が、児童生徒の学力と非認知能力を効果的に向上させるかを明らかにすること。

※ 全国学力・学習状況調査等を用いて、上記の研究を行っている。

<経歴等>

2019年4月～ 宮城教育大学 大学院教育学研究科 専門職学位課程 高度教職実践専攻  
(教職大学院) 教授 (現職)

2021年4月～ 文部科学省 学力調査アドバイザー (現職)

<主な著書>

○『IRT 分析ソフト EasyEstimation による全国学力・学習状況調査の検証と経年比較』  
(パイディア出版 2022年6月13日発行)

○『子どもの言葉データサイエンス入門－jReadability の活用と検証－』  
(パイディア出版 2021年)

「学力が伸びた生徒の割合」 中学1年生国語で62.4%って本当？

— 「測定された学力」と「実態としての学力」 —

宮城教育大学教職大学院 教授 田端健人

### 1. 「実態としての学力」は育ち続けている

この分析報告書の中には、「令和4年度調査から学力が伸びた児童生徒の割合」が掲載されています。例えば、中学1年生国語で62.4%とされています。では、37.6%の生徒は、国語の学力に変化がなかったり、低下したりしたのでしょうか？確かに、ふくしま学力調査は児童生徒の前年度からの「伸び」「変化なし」「低下」を測定できます。しかし、およそ4割もの生徒が、小6の時と国語の力が変わらないもしくは低下したというのは、おかしな話ではないでしょうか。

ここで私たちは「テストで測定された学力」と「実態としての学力」とを区別しなくてはなりません。小6の春から中1の春までの1年間、子どもは、学校内外で、たくさんの言葉を読み書き、聞き話す経験を積み重ねています。「実態としての国語力」が同じだったり、いわんや



低下したりするはずがありません。テストがその実態をうまく測定できなかっただけです。どれほどうまく作られたテストでも、測定できるのは、実態としての学力の一部でしかないので

す。  
ふくしま学力調査の個票を児童生徒に返す時には、特に前年度から学力レベルに変化がなかったり、下がったりした児童生徒に返す時には、「測定された学力」が「実態としての学力」と同じでないことに注意してください。実態としての学力をキャッチできるのは、先生方の実践感覚です。「あなたの学力が伸びていることは、先生にはよくわかっているよ、例えばね・・・」というメッセージを添えてもらえると、子どもの自信になるのではないのでしょうか。「今回のテストではそれが点数に表れなかったけど、・・・を続ければ、来年はきっと点数にも表れるから」と伝えてみてはどうでしょうか。この言葉には「ピグマリオン効果」があるかもしれません。将来の学力向上を先生が予知すると、生徒はそれを実現しやすくなるという効果です。

たとえ測定された学力が伸びていなくても、子どもの学力の実態の伸びを先生が実感していれば、それが非認知スコアとか学習方略とか生活習慣とかの伸びに表れているかもしれません。学力レベルで伸びがみられなかった児童生徒については、データの他の箇所での伸びを探して見つけ出してほしいと思います。

## 2. 「測定された学力」の奥深さ

測定された学力は、実態としての学力のごく一部にすぎません。しかし、一部でしかないにもかかわらず、この数値は非常に謎めいています。

例えば、どうすれば学校や自治体といった集団の学力平均値を上げることができるかを考えてみましょう。これは難問です。それを解こうと分析や調査を重ねてみると、集団の学力平均値は、ドリルや直前のテスト対策で向上するような単純なものではないことがわかってきます。

学力向上を実現した学校と自治体の調査から、私たちは学力向上のポイントを、「組織力」「多角的な取組」「リーダーシップ」の3点にまとめました。集団の学力は組織の力があってこそ動かすことができるという見解です。「組織」は、「町教育委員会」「校長会」「学校」に分けることができます。これら3組織が目標と情報を共有し、相互理解を深めながら協働し、それぞれ効果的に機能するのが「組織の力」です。調査した学校では、「家庭学習の定着」「読書の奨励」「授業改善」「落ち着いて学習できる環境づくり」といった「多角的な取組」を試みました。「町教育委員会」「学校長」「学力向上推進委員会」の「リーダーシップ」も重要です。町教育委員会は、各学校の児童生徒の様子を視察・聞き取り・把握し、学力調査のデータ分析を率先して行いました。学校のみドルリーダーの意識向上にも取り組みました。学校長は、安心して働くことができる職場づくりに努め、教職員のそれぞれの長所を生かせるよう配慮し、生徒指導も学力もチームで動く姿勢をとり、学力保障を共通の目標に掲げました。学力向上推進委員会では、お互いの学校の課題や成果を共有し、頻繁に情報交換しました。

ここまでくると、「学力向上」は、「点数を上げろ」という号令ではなく、児童生徒の知徳体すべての成長を支え促す組織的取組であり、教職員が安心して共に働くことができる組織への改善です。集団学力スコア向上の水面下には、この町の教育関係者全員を巻き込んだ、大がかりな組織的変革があったのです。この町の場合、測定された学力は、氷山の一角だったのです。

これはおよそ10年前の取組でした。その頃とは教育長も変わりました。次の教育長も熱意溢れる方で、町全体で取り組んできた学力向上を受け継ぎつつ、アップデートを重ねています。今年度の学力調査でもこの町の平均は全国平均を超えました。今年度は特に、家庭環境や教育資源に恵まれない地区の小学6年生の国語と算数が、全国平均を大きく超えたことに、関係者一同大喜びしました。